

「百人一首 小倉の山踏」の俗語（訳語）について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深井, 一郎, 道井, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20477

「百人一首 小倉の山踏」の俗語（訳語）について

— 近世語研究（七） —

深井一郎
道井登

（石川県立桜丘高校教諭）

はじめに

「百人一首小倉の山踏」（以下「山踏」と略記する）は、本居宣長、春庭の門人の中津元義が、初学者のために、宣長の「古今集遠鏡（以下「遠鏡」と略記する）」に倣って、当時の俗語をもって訳したものである。その俗語＝訳語についての実態の考察を、「遠鏡」の俗語と照応させながらすすめたい。

まず概観してみると、例言については、「山踏」の例言は、「遠鏡」の例言に倣って記されている。その書き方は、細かい例証のほとんどを省略し、考え方のみをしるす、また、扱う項目や項目語も明確なもののみしるし、あとは省略するという書き方である。訳のつけ方についても、「遠鏡」の例言中の説明しやすい、明確なもの範囲内において、忠実な態度で訳をつけている。しかし、宣長のような歌のこころを汲みとった工夫した訳のつけ方は見られない。そのことは以下の照応の中でも明らかにするが、例えば、「遠鏡」では、「デアラウカ、ヤラ、デカナアラウ、タサウナワイマア、ワイノ、」などと、訳語（俗語）の横に、それに相当する雅語を対照させて、つけて、この語がこの語に照応していることを明示することが多いのに対して、「山踏」では限られている。また、「遠鏡」では、訳のつけ方に大いなる工夫がなされ、補訳部分が

多いのに対し、「山踏」では補訳部分が少ないのである。使用した俗語の用法においても同じことが云える。

考察は

(一) 「山踏」の序言について

(二) 「俗語」の考え方について

(三) 各語の実態の考察

(A) 「ぞ、こそ」と「サ、ガサ」

(B) 「けりけるけれ」と「ワイ」

(C) 「かな」と「カナ」

右の順序ですすめる。

(一) 「山踏」の序言について

「山踏」の序言に、本居春庭は、

「此百首は……世にしらぬ人なく女わらはへもよくおぼえしりたる」ものである。しかし、「た、ひたふるにのみならひおほゆる世のならひ」であって、「もてあそひものやうになりもて行つ、歌の心はいかに……まれく其意をしらまほしくおもふも常に物まなはぬ人」にとつても「小倉の山踏は、古今集の遠鏡にならひて、その心をかたはらに書たれば、見るにいとかやすきとひ言

にしあれば、聞えかたきところ有へくもあらず……おのつからそのころもきこゆへく、又ものよくまなひ、歌よく見しらむ人なりとも、よく其意」が理解できるものであると序言をそえている。元義は、

「……古今集遠鏡といふ書に倣ひて。百人一首どもを。今の俗言に譯せる也。抑この百人一首といふもの……註さくしたる書ども、亦世にあまたあれど。そは遠鏡にもいへりしごとく註譯といふ筋は。譬ば遙なる所の事どもを。その人つてに聞たるが如くにていかに委く語りきかせたらむにも。まのあたり行てみるには。猶にるべくもあらず。さるを世の俗言に訳して味へみる時は。もはら其所に行て見るにひとしくて。こまかなるころばへのたしかに得らるゝ事。此譯にしくものなし。」と、「遠鏡」の例言の一部分を、ことばをかえて、その意を写し、自分の例言としている。「遠鏡」では、

「うひまなびなどのためには、ちうさくはいかにくはしくときたるも、物のあぢはひを、甘しからしと、人のかたるを聞きたらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、其事を今おのが心に思ふごとは、さとりえがたき物なるを、さとびごとに譯したるは、たゞにみづからさ思ふにひとしくて、物の味を、みづからなめて、しれるがごとく、いにしへの雅言ミヤコトみな、おのがはらの内の物としなれば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝ、ことおほきぞかし」

と、わかりやすく説いている。

宣長のこの考え方は、「古語不レ通セ則古義不レ明ヲ焉。古義不レ明古学不レ復ヲ焉。」という春満の考えを受けており、それを、初学者には註釈がどんなに委しくても、詞の勢ひ、テニヲハの効果、細かな趣は理解できないので、俗語に訳したと云い、初学者自身は、その俗語で、古代の雅語の趣き、テニヲハの効果などを

自分のものに消化し、歌の細かな味を確実に理解できるものという考え方に立っている。その宣長の考え方を元義は、そのまゝ受けついで、「山踏」をしるしたのである。

この宣長は、雅語を俗語レ俚言ニ訳すにあたって、富士谷成章の「かざし抄」の影響を受けている。雅語の俗語訳には、他に、加藤景範の「和歌虚詞考」、上田秋成の「也哉抄」、御林の「詞葉新雅」などがあげられる。

(二) 「俗語」の考え方について

俗語レ俚言は雅語に対したものである。雅語は「みやびことば」、俗語は「さとびことば」で、雅語は古今集などを中心した古典語、俗語は、当時の口語の意である。その俗語について、「遠鏡」は、「俗言は、かの国この里と、ことなることおほきが中には、みやびごとにちかきもあれども、かたよれるぬなかのことは、あまねくよもにはわたしがたければ、かゝることにとり用ひがたし、大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也……」

「俗言にも、しなレのがある中に、あまりいやしき、又たはれすぎたる、又時々いまめきことばなどは、はぶくべし……」

と、辺鄙な田舎詞、卑俗な言葉、ふざけた言葉、時々の流行語は通じにくいから避けるべきである。京都辺の言葉で訳すのがよいと云っている。また、

「……歌はことに思ふ情のあるやうのまゝに、ながめ出たる物なれば、そのうちとけたる詞して、譯すべき也……」

「……男のより、をうなの詞は、ことにうちとけたることの多くて、心に思ふすぢの、ふとあらはなるものなれば、歌のいきほひに、よくかなへることおほかれば、をうなめきたるをも、つかふべきなり、又いはゆるかたことを用ふべし……」

と、女の言葉は、うちとけた物言いが多く、心に思っていることが、そのまゝ、ふつと現われるものであるから、歌の調子によく

合うので、女性風の語を詠語に用いるべきである。片言（詠言）も用いるべきであると、その俗語の範囲を限定している。また、雅語に対しての俗語の訳し方についても、

「みやびごとは、二つにも三つにも分れたることを、さとび言には、合せて一ツにいふあり、又雅言は一つなるが、さとびごとにては、二つ三つにわかれたるもあるゆゑに、ひとつ俗言を、これにもかれにもあつることあり、又一つ言の譯言の、こゝとかしこと異なることもあつる也、……」

「まさしくあつべき俗言のなき詞には一つに二ツ三ツをつらねてうつすことあり、又は上下の語の譯の中に、其意をこむることもあり、あるは、二句、三句を合せて、そのすべての意をもて譯すもあり……」

と、「遠鏡」で、俗語の訳し方についての考え方を宣長は述べているが、元義はこの考え方に従っていることは言うまでもない。元義は、

「……つばらなる事は。かの遠鏡に譲りて。ここにはもらしつる事も多ければ。遠鏡を見てわきまへしるべし。」と例言の終りにしるし、この訳し方についての部分を省いている。「遠鏡」のこの部分の考え方は、「かざし抄」の例言の「……ひとつに、里言ひとつづ、を合はせてもありぬべきを、二つ三つより四つ五つをも記す……多義をそなへたる詞は、一つの里言に事尽きねばなり。」などの部分の考え方と通じており、宣長も成章もともに工夫に苦勞しているところである。

(三) 各語の考察

- (A) 「ぞ、こそ」と「サ、ガサ、コソ」
 (1) (ア) 「ぞ」と「サ、ガサ、モサ、ハサ」
 (イ) 「ぞ」と「……サ……サ」
 (ウ) 「ー」と「サ」

(ウ) 雅語「ぞ」に対しての俗語「サ、ガサ、モサ、ハサ」について(二五例)

「山踏」の例言に

「てにをはのこと、ぞもじは訳すべき詞なし、がといふて聞ゆる所もあれど、殊に力をいれたるぞもじは。ガとのみいひては、事たらずよりて、今はサといふ詞を添へて訳す。……」

とある。強調の係助詞「ぞ」であるが、この詞は訳すべき詞なしと云っている。このことは「遠鏡」の例言にもその通り記してある。

1、「田子の浦ゆうち出てみれば、真白にぞ富士の高根に雪は降りける」(四)（この山踏での(四)は百人一首の通し番号である。古今集では国歌大観番号をあらわす。以下同じ）↓「田子ノ浦ヨリズツト出テミレバ、ハ、ア真ツ白ニサ富士ノタカネニ雪ガフツタワイ」

2、「玉の緒よ絶なばたえねながらへば忍ぶる事のよわりもぞする」(八九)↓「命ヨマア絶ルナラバイツソタエテシマへ長イキシテキタラバシノビカクス事ガヨワツテサアラハレル事モアラウニ」

この「ぞ」に対しての俗語「サ」であるが、「遠鏡」は、

「花がといひて、其所にちからをいれて、いきほひにて、雅語のぞの意に聞カすることなるを、しか口にいふいきほひは物には書とるべくもあらざれば、今はサといふ辭を添へて、ぞにあてて、花ガサ昔ノエタと譯す。ぞもじの例、みな然り」

と云っている。この「遠鏡」の考え方に、「山踏」は従っている。(ア)の1、2の例は、「遠鏡」の例言に従ったものであるが、(ア)の2の例は、「もぞ」の形で、不安、懸念の意をあらわすので、「……ヨワツテサアラハレル事……」と、強調の「サ」の位置が、その気持のかりどころに置かれたものである。訳し方、文意のとらえ方の工夫が見えるところである。

3、「おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時ぞ秋はかなしき」
 (五、古今集二五)↓「……其チツタ紅葉ヲ鹿ガフミ分テアルイテ

鳴声ヲキク時分ガサ秋ノウチテハイツチ悲シイ時節ヂヤ

4、「つくばねの峯よりおつるみなの川恋ぞ積りて淵となりぬる」(二三)↓「……僅ナ水ガツイ下テハミナノ川ト云深イ川トナルヤウナモノデ恋モサツモリノテ淵ノヤウニフカウナルワイ」

5、「山里は冬ぞさびしきまさりける……」(二八、古今集三二五)↓「山里ハイツテモサビシイガ冬ハサベツシテサビシサガマシタワイ……」

この(ア)の4の「ぞ」↓「モサ」は、単に「ガサ」のような強調ではなく、水が積り積って深い淵となるように、私の恋「モサ」積り積って深い物思いになるという意の「モサ」である。「ぞ」がその「モサ」の意をあらわしている。「恋ぞ」に「恋モサ」という訳をあてたのである。また(ア)の5の「ぞ」↓「ハサ」も同じで、「冬ぞ」には「冬ハベツシテ」と、特に強くとり立てての強調の意があるので、その歌のこゝろを汲みとって、「冬ぞ」に「冬ハベツシテ」と訳をあてたものである。

(イ)雅語「ぞ」に対して俗語「サ：サ」について(一例)

1、「山里は冬ぞさびしきまさりける人も草もかれぬと思へば」(二八、古今集三二五)↓「山里ハイツテモサビシイガ冬ハサベツシテサビシサガマシタワイ人ノコヌ事ヲ人目ガカレルト言ヂヤガ今マデハタマシユタ人目モカレル草モ枯レタニヨツテサ」(傍線、補訳部分)

この訳語のあとに「かれぬとおもへばはた枯れぬばといふに同じ 思ふ意なしと遠鏡に云り」と補註をしているが、「山踏」の古今集の訳語は「遠鏡」と全く同じである。この(イ)の1の歌も、遠鏡三一五と補註まで同じである。師の説に従っていることを示すものである。「遠鏡」の「枯れぬれば」に「枯レタニヨツテサ」といふ訳語をあてたのを写したものである。

(ウ)雅語「ぞ」が用いてなくて、俗語の「サ」が用いられているもの(三例)

1、「あふ事のたえてしなくば中ノ人をも身をも恨ざらまし」(四四)↓「世ノ中ニ男女ノ逢ト言事ガトントサナイ物ナラバカヘツテ人ヲ恨ムト云事モ我身ヲ恨ムト云事モアルマイニ」

この場合、「たえてしなくば……」に対して「トントサナイ物ナラバ」と訳語をあてている。強調の副助詞を含む「たえてし」に対して「トントサ」があてられたものである。この他に、

2、「……徒にわが身世にふる……」(九)↓「一度モミズニサフシハツレソフテキル男ニ……」

3、「……長月の有明の月を待出づる哉」(二二)↓「……有明ノ月ガハヤモウデタワイ約束モセナシタ有明ノ月サヘ待チダシタニソレニサ待人ハ扱モノコヌ事哉……」

がある。この(ウ)の2・3の「一度モミズニサ」、「ソレニサ」の「サ」は、(ウ)の(1)の場合と違って間投助詞的用法のものである。以上が「山踏」の「ぞ」と「サ」の用法であった。

次に「遠鏡」の「ぞ」と「サ」をみると

(ア)「ぞ」と「サ、ガサ、モサ、ハサ」

(イ)「ぞ」と「サーサ」

(ウ)「のみぞ」と「トントサ」

(エ)「ぞ」と「ゾ、ゾイ、チャゾ、チャゾイ、チャカ、チャ」

(オ)「ー」と「ゾ、ゾイ、ゾエ、ゾヨ、ゾヤ」

(カ)「ー」と「サ」

(ア)雅語「ぞ」と俗語「サ」(百三七例)、ガサ(三六例)、モサ(二例)、ハサ(二〇例)、ガ、ハ、コソ、サテモ」について

「ぞ」と「サ」、「ぞ」と「ガサ」については「山踏」の用例についての解説で省略する。

「ぞ」と「モサ」「ハサ」については、
1、「……夜のうちに花ぞちりける」(一一七)↓「……夢ノワ

チニモサ花ノチル事バツカリヲ見ルワイ」

2、「……たなはたのぬるよの数ぞすくなかりける」（二七九）↓
「……逢ツシヤル夜ノ数ハサスクナイコトヂヤワイ」

この(ア)の1「モサ」は、「夜のうちにもぞ花」とよんで、「夢ノウチニモサ……バツカリ」と訳語をあてた、その「モサ」である。この「モサ」は詠嘆的な強調の意の「モサ」である。また、(ア)の2の「ハサ」はとりたてての強調法の「ハサ」である。「ハサ」と訳語をあてたものは二〇例ある。次に、

「…とぞ」には「…トサ」、「…にぞ」には「…ニサ」、「さへぞ」には「マデガサ」のように「ぞ」が受けて強調すべき語の所に「サ」が用いられるのが、一般的用法だが、次のような例がある。

3、「……うつろふ花に風ぞふきける」（一〇五）↓「……ウツロウタ花ヲ風ガ吹テチラスワイ……」

4、「……一よも夢に、こえぬ夜ぞなき」（九八〇）↓「……其白山ヲ夢ニコエヌ夜ハ一夜モゴザラヌ」

5、「……濱になくたづの尋ねくればぞありとだにきく」（九一四）↓「……尋ネテ参ツタレバコソ御無事ナト云事ナリトモ聞タレ……」

6、「わがせこをみやこにやりて塩がまのまがきの鳴のまつぞ恋しき」（一〇八九）↓「……待テ居レバサテモ恋シイ」

(ア)の5は「ぞ」に「コソ…已然形」の意味を読みとり、(ア)の6は「ぞ」に「サテモ」（本当に）という意味をよみとつての訳語である。

(イ)、「ぞ」と「サーサ」について

1、「ちらねどもかねてぞをしきもみち葉は今のはかぎりの色と見つれば」（二六四）↓「此紅葉ヲ見レバ、マダチリハセネドモ チラヌサキカラサ」モウ十分にソメタレバ オツツケチルデアラウト思ヘバサ」

2、「ちはやぶる宇治のはし守なれをしぞあはれとは思ふ年のへ

ぬれば」（九〇四）↓「……其方ヲサオレハフビンニ思フ……年ヘタ老人ヂヤト思ヘバサ」

この(イ)の1、2例の「…サ…連体形終…已然形十ば」の倒置法用法、もしくは補足的用法の部分に、「…サ…サ」の訳語を用いている。このような例は一〇例ある。この「…サ…サ」の訳語をとらないものが他に二例ある。

3、「おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつせなれば」（五五七）↓「ワシガ涙ハ 又タソソナコツツチーヤナイドウモセキトメラレヌホド流レテ瀧ノ水ヂヤ スレーヤオマヘノソノ袖ニツ、マレヌ玉ト見エルクラキノ涙ハ オロカナ事イノ」

この(イ)の3は、「涙ぞ…たぎつせなれば」に対し、「涙ハ……オロカナ事イノ」と訳をあてている。「遠鏡」の訳語に共通して云えることがある。それは、雅語に俗語をあてて訳す場合、共通して同じ訳語で訳しうる場合、例えば上記の「サ…サ」のような共通用語が用いられており、その共通用語で、大部分があてはめられる。しかし、雅語の表現の趣きとか、言葉の勢ひ、テニヲハの効果と考えられる場合には、その歌のこゝろを汲みとつた、作品に応じた訳し方、訳語のあて方がなされている。

歌の結びが「…已然形十ば」の形になっているもので、訳語に「…サ」があてられているものは、一般的には少ないが、「…サ」の訳語があてられるものには、次のようなものが見られる。

4、「……と思へば」（八八〇）↓「……存ズレバサ……」

5、「……身なれば」（六八一）↓「……身ヂヤニヨツテサ」

6、「……人しなれば」（三三三）↓「人ガナイヂヤニヨツテサ」

7、「……よにもすまへば」（六三三）↓「人ガアデサ」

「ぞ…連体形終止…已然形十ば」の場合は、「サ…サ」の訳し方が多いのに対して、「…已然形十ば」の場合は「…サ」の訳し方が必ずしもあてられるとは限らない。

「…サ…サ」の訳し方をとる雅語に「こそ…已然形…已然形十

ば」の場合がある。

8、「……なほこそかなしければ別れむことをかねておもへば」(四二九)↓「……ヤツハリソレデモサカナシイワイ、アへバマダ別レヌサキカラハヤ別レル事ヲ思ウニヨツテサ」

この他に(八三三)の歌がある。

(ウ)「のみぞ」と「トントサ」について

「トントサ」の訳語は「山踏」の「たえてしなくば」の場合に用いられていたが、「遠鏡」では、

1、「……桜花雪かとのみぞあやまたれける」(六〇)↓「……咲テアル桜花ヲ見レバトントサ雪ヂヤナイカ」

とある。「のみぞ」の訳語は一般的には「バツカリサ」(三七、五四、六〇六など六例)である。他に「ホドサ」(六一二)がある。

(エ)「ぞ」と「ゾ、ゾイ、チャゾ、チャカ、チャ」について

1、「……たがぬぎかけしふぢばかまぞも」(二四二)↓「……タレガナイデ掛テオイタ袴ゾマア……」

2、「かへる山なにぞは有である……」(三八二)↓「……ソノカヘル山ハ何シノヤクニタツ事ゾ」

3、「……たが袖ふれしやどの梅ぞも」(三三三)↓「……タレガ袖ヲフレタ此庭ノ梅ノ花ゾイマア」

4、「……ことに出ていはぬばかりぞみなせ河……」(六〇七)↓「……詞ニダシテイハヌト云バカリヂヤゾイ……」

文末もしくは文の終止用法のところに用いられた「ぞ」の訳語「ゾ、ゾイ」である。文中の係助詞「ぞ」の訳語は「サ」が大方であったが、文末の場合は、「ゾ」「ゾイ」が大方で、「サ」の用いられた例はない。以上が一般的であるが、文中の「ぞ」に「チャゾ」などの訳語をあてたものがある。

5、「名にめでておれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな」(二二六)↓「女郎花ト云名ガヨサニ、チョット馬カラオリテ見タバカリヂヤゾ、カナラズオレガ女ニオチタト人ニ云デハナイ

ゾヨ

6、「花見つ、人まつときはしろたへの袖かとのみぞあやまたれける」(二七四)↓「……ソノ白イ花ガ、ソノクル人ノ白イ衣ノ袖ノヤウニ見エテ ヒタモノソチヤカトトリチガヘラル、ワイ」

7、「……あまのと渡る鷹にぞ有ける」(二二二)↓「……船ノヤウニ見エテ来ルモノハ 鳴テワタル鷹ヂヤワイ」

8、「いのちやはなにぞは露のあだ物を……」(六一五)↓「命ガサ何シヂヤゾイ ホンノ露ノヤウナアダナ物ヂヤモノ……」

(オ)「ぞ」が用いられなくて、「ゾ、ゾイ、ゾエ、ゾヨ、ゾヤ」が用いられている例

1、「春霞たてるやいつこ……」(三三)↓「……ドレドコヂヤゾ……」

2、「……梅の花うゑじ……」(三四)↓「……梅ハウエマイゾ……」

3、「たれしかもとめてをりつる……」(五八)↓「……折テキタ事ゾ」

4、「……たれにか見せむ」(三八)↓「……誰ニ見セウゾイ」

5、「……山彦はほかに鳴ク音をこたへやはせぬ」(二六一)↓「……山彦ハナゼニココヘヒカヌゾイ」

この(オ)の項の「ゾ、ゾイ」は雅語中の疑問詞の用いられた文の訳語に用いられ、疑問の意を強める用法のものである。この用法は既に徒然草にある。

6、「……みだれむと思ふ我ならなくに」(七二四)↓「……心ヲチラスワシヂヤナイゾエ」

7、↓「……月ノ事バカリヂヤナイゾエ」(八八四、補訳部分)

8、↓「……オソガケヂヤト云テ為マイヤウハナイゾヤ」(四六七、補訳部分)

9、↓「……恋ハスマイ事ヂヤゾヤ」(五四四、補訳部分)

10、「……見きとないひそ人のきかくに」(八一二)↓「……人ノ聞クトコロデ必ず云デハナイゾヤ……」

11、「……さくら花ちるといふことはならはざらなむ」(四九)↓
 「……ドウゾチルト云事ヲバホカノ桜ニナラハヌガヨイゾヨ」

訳語「ゾエ」は念を押す意で用いられ、洒落本・滑稽本などにも見られる近世語である。訳語「ゾイ」は聞き手へ、働きかける時に用いられる語で、歌舞伎、浄瑠璃、洒落本、滑稽本などに用例が見られる。「ゾヤ」「ゾヨ」は古くから用いられている語である。

(功) 雅語「ぞ」が用いられていなくて、訳語「サ」が用いられている例

1、「吹風をなきてうらみよ……」(二〇六)↓「……アノ吹テクル風ヲ恨デナケサ、オレガアノ花ニ……」

2、「……秋は限と見む人のため」(三〇九)↓「……サウ思フテ居ル人ノタメニサ」

この他に、山踏の(ウ)の2・(古今集一―三)の「一度モミズニサ」、(ウ)の3・(古今集六九一)の「ソレニサ」がある。次に

(2) 「こそ」と「コソ、サ、ガサ」

(ア) 「こそ」と「コソ…已然形」

(イ) 「こそ」と「サ、ガサ」

(ウ) 「もこそ」と「——」

(エ) 「——」と「コソ—已然形」

「こそ」については、「山踏」で

「こそは俗言にもこそといふて。聞ゆる所もあれど。またぞと
 同じ格に訳して聞ゆるところもあり。」

とある。

(功) 雅語「こそ」に対して俗語「コソ—已然形……」を訳にあてた例

1、「八重葎しげれる宿の淋しさに人杜みえぬ秋は来にけり」(四

七)↓「七重八重むぐらガシゲツテサビシイ家ナレバ人コソコネサ
 ビシサノ添フ秋ハ来タワイ」

2、「我袖はしほひにみえぬ沖の石の人こそしらねかわくまもなし」(九二)↓「ツレナイ人ヲ思ヒマスル故ニワタシカ袖ハ汐干ニモ
 出ヌ沖ノ底ニアル石ノヤウニ人コソシリマセネ泪ノカワクヒマト
 云ハゴザリマセヌ」

「こそ」に対しての訳語「コソ…已然形」であるが、(ア)の1「人
 コソコネ」、(ウ)の2「人コソシリマセネ」は共に逆接の意を含み、
 文意が切れないで、下に続く形になっている。「人は来ないけれど
 も云々」、「人は知りませんが云々」の意である。この「こそ」の
 訳語「コソ—已然形」は、すべて、逆接の意を含み、文意が切れ
 ないで、下に続くものである。

雅語の「こそ—已然形」を「コソ—已然形」に訳したものであ
 るが、他に「ドウモツイテハエイカネバ……」(三七三)、「晝ハ恋シ
 サニエコタヘイデ」(四七〇)、「エナガレモセズニ」(山踏三三、古今
 三〇三)、「心ノホドヲカウトサヘエイハネバ」(山踏五一)の「エ—打
 消」がある。この場合は、訳語「俗語」に用いられて、雅語には「え
 —打消」の形は用いられてない。「山踏・遠鏡」に見られる特色あ
 る俗語表現の一つである。

(イ) 「こそ」に対して俗語「サ、サガ」があてられている例

1、「長からん心もしらず黒髪の乱れてけさは物を社におもへ」(八
 〇)↓「末ナガウソフ事カソハヌ事カ男ノ心モシラネバ朝ノ黒髪ノ
 乱レタヤウニモヤクト心ガ乱レテ今朝ハキツウ物思ヒヲサイタ
 シマス」

2、「月みればち々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらね
 ど」(二三三)↓「月ヲミレバオレハイロト物ガサ悲シイワイオ
 レヒトリノ秋デハナケレド」

例言にあるように「こそ」に俗語「サ、ガサ」をあてたもので、
 「ぞ」に「サ、ガサ」をあてたのと同じ用法のものである。

(ウ)「もこそ」に対しては「コソ、サ、ガサ」の訳語が用いられない。

1、「音にきく高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれも杜すれ」(七二)↓「音ニキコエタ高師ノ浜ニタツアタ波ノヤウニ名高イアダ人ニ思ヒハカケマスマイ カノアゲ浪ニヌレルヤウニ思ヒニ袖ガヌレル事モアラウスリヤ何ノカヒモナイ事デゴザルワイナ」(波線筆者)

この波線部に、雅語「もこそ」の不安・懸念の意があらわされている。この訳のあて方が、例言にもあった「まさしくあつべき俗言なき詞には……上下の語の譯の中に其意をこむることもあり……二句三句を合せて、そのすべての意をもて譯」した例である。

(エ)「こそ」が用いられなくて、「コソ……已然形」が用いられている例

1、「有馬山ゐなのさ、原風ふけばいでそよ人を忘れやはする」(五八)↓「……サアソレヨ其コトイノオマヘコソ忘レサツシヤレワシハ少モ忘レハイタサヌ其ヤウニ約束シタ人ヲ忘レマセウカイ」

この「……人を忘れやはする」に対して「其コトイノオマヘコソ忘レサツシヤレワシハ云々」と訳語をあてたものである。反語「やは」の訳語には「コソ……已然形」の訳し方がもっともふさわしいと考えたのであろう。もちろん「遠鏡」の訳し方をまねたものである。

次に「遠鏡」の「こそ」と「コソ、サ、ガサ」の実態をみてみよう。

- (ア)「こそ」と「コソ……已然形」
- (イ)「こそ」と「サ、ガサ」
- (ウ)「もこそ」と「——」
- (エ)「——」と「コソ」
- (オ)「こそ」と「ハジメテ」など

(ア)「こそ」と「コソ……已然形」の例
この例は、33例ある。

1、「……梅ノ花色こそ見えぬ……」(四二)↓「梅ノ花ガ暗ウテ色コソ見えネ 香ガカクレルカ……」

2、「……しるしなき物をけふこそさくらをらばをりてめ」(六四)↓「……折ルナラ早ウ今日ノ内ニコソ折ウ事ナレ 明日ハモウチルデアラウ」

この「こそ」に対して「コソ……已然形」の訳し方は、「山踏」の場合と同じで、逆接の意を含み、文意を切らずに下に続ける形のものである。(ア)の1のように雅語「色こそ見えぬ」に対して訳語「色コソ見えネ」と全く同じ場合があるが、宣長には、「コソ……已然形」は俗語として自由に使える慣れた表現の型であったように考えられる。三三例も例が見られることもそのことをうらがしている。

(イ)「こそ」と「サ、ガサ」について

1、「……山風にこそみだるべらなれ」(三三)↓「……山風ニサミダレルデアアラウサウ見エル」

2、「秋の夜は露こそことに寒からし……」(一九九)↓「……秋ノ夜ハ露ガサ カクベツニ寒イサウナ」

この「こそ」に対して「サ、ガサ」をあてて訳したものが、五七例ある。

(ウ)「もこそ」に対して、俗語「サ、ガサ、コソ」が用いられない例、

1、「……色にはいでし人もこそしれ」(一〇四)↓「……ドウゾ顔イロニハダスマイ、人ガ知ラウモシレヌホドニ、人ガ知テハアマリアハウラシイ事チャニ」

2、「……たなばたの久しき程にまちもこそすれ」(二八一)↓「……棚機ノ久シイ一年ノ間ダヲ待ツノニアヤカツテ、コチモ久シウ待ツヤウナ中ニナル事モアラウホドニ」

この(ウ)の1および2はともに不安・懸念の気持をあらわしている。この他に

3、「世ノ中はかくこそ有けれ……」(四七五)↓「ヨノ中ト云モノハマアカウシタ事チャワイ……」

この「こそ」に対して「カウシタ事チャワイ」の訳をあてたものである。「ぞ」の場合にも同じ用法が見られる。(二二二、二二六、六一五)などである。

(エ)「こそ」が用いられていなくて、俗語に「コソ…已然形」の訳語が用いられている例

1、↓「……ワシガ今日参ツタレバコソアノ桜ヲ花チャトハ見レ……」(六三、補訳部分)

2、↓「色コソ物ニシム物ナレ、別レト云コトハ色デモナイニ……」(三八一、補訳部分)

この俗語の「コソ…已然形」の型のもので、補訳部分に用いられたものが九例ある。補訳部分以外に三例がある。

(エ)「こそ」が用いられていなくて、俗語に「コソ」の用いられている例

1、「……たれかことく分てをらまし」(三三六)↓「……誰レガ雪ト梅ノ花トヲヨウベツベツニ見分テ折ウゾイ、タレモエ見分ケハスマイ、香ガマガハネバコソ」(補訳部分)

2、↓「……今日ノヤウナアリガタイ事ニハアハウモノカイ、年ガヨツテ生テキレバコソ」(九〇三)

(エ)の1は「誰か……折らまし」、2は「今日にあはましものか」の反語形になっている部分の補訳に「……コソ」の訳語が用いられているものである。

(オ)「こそ」に対して「ハジメテ」と訳語をあてたもの。

1、「あふ事のもはら絶ぬる時にこそ人の恋しきこともしりけれ」(八二二)↓「……今カウスキト絶テアハレヌ時節ニナツテハジメテ人ノ恋シイ事モ知ツタワイ」

この「こそ」は俗語「ハジメテ」の傍注がつけられているものである。あゆひ抄では、この「こそ」は「何よりかより」と訳すところである。「遠鏡」では「人に会うことが、全然なくなってしまうた今こうはじめて」の意に解したものである。

「遠鏡」の例言に、この「こそ」について

「こそはつかひさま大かた二つある中に、へ花こそちらめ根さへかれめやなどのやうにむかへていふ事あるは、さとびごとく同じく、こそといへり、今一つへ山風にこそみだるべらなれ、へ雪とのみこそ花はちるらめ、などのたぐひのこそは、うつすべき詞なし、これはぞにいとちかければ、ぞの例によれり……」

と、大筋の考え方が示されている。この例言に示されていないことについては、上記にしるしたごとくである。

(B)「けりけるけれ」と「ワイ」、「ワイナ」

(ア)「けりけるけれ」と「ワイ」

(イ)「こそ」と「ワイ」

(ウ)「もこそ」と「ワイナ」

(エ)「けりけるけれ」と「——」

(オ)「——」と「ワイ」

(ウ)「けりけるけれ」に対して「ワイ」の訳語をあてた例

「けりけるけれ」について、「山踏」は、

「けりけるけれは皆ワイと訳す。語の切れざるなからにある。けりけるけれは、殊に記さず。」

とある。「遠鏡」には

「けりけるけれは、ワイと譯すへ春は来にけりを、春ガキタワイといへるがごとし、またこそその結びにも、ワイをそへてうすことあり……」

とある。この「けりけるけれ」の「山踏」の実態は、

1、「……真白にぞ富士の高根に雪は降りける」(四)↓「……真ッ
白ニサ富士ノタカネニ雪が降ツタワイ」

2、「……夜ぞ更にける」(六)↓「……夜ガサフケタワイ」

3、「……秋は来にけり」(四七)↓「……秋ハキタワイ」

「ける、にける、にけり」とも「タワイ」と訳されている。歌における「けり」は詠嘆の意をもつもので、「タワイ」と訳語があてられている。この類例は、一四例ある。

(イ)「こそ」の結びに「ワイ」をそえて訳されている例

1、「……物こそかなしけれ」(二三)↓「……物ガサ悲シイワイ」

2、「……名こそ惜けれ」(六五)↓「……名ガサヲシイワイ」

3、「……道こそなけれ」(八三)↓「……ノガレルトコロハトントドコニモナイワイ」

4、「……名こそ流れてなほ聞こえけれ」(五五)↓「其名ハサ今ノ世マデツタハツテヤツハリ人が皆コウ知テキルワイ」

この類のものが、六例ある。文意に詠嘆的確認の意をとり、「ワイ」の訳語をそえたものである。「こそ」は強調の意のもので、「ガサ、ハサ、サ」と訳語があてられている。かざし抄では「けり、ける」には「……チャ」という訳語があてられることが多い。

(ウ)「もこそ」に対して「ワイナ」の訳語がえられている例

1、「……袖のぬれも杜すれ」(七二)↓「……袖ガヌレル事モアラウスリヤ何ノカヒモナイ事デゴザルワイナ」

この「もこそ」已然形「もこそ」には「サ、ガサ」の訳語があてられていない。文意には、不安・懸念の意がこめられているものである。このことについては上述したが、「こそ」に対して「ワイ」をそえて、一詠嘆的確認の意で一訳されている。

(エ)「けりけるけれ」に対して、俗語「ワイ」の訳語が用いられていない例。

1、「うかりける人をはつせの山おろしよ……」(七四)↓「ツレナカツタ人ヲドウゾナヒカセウト……」

2、「……命さへながくもがなと思ひけるかな」(五〇)↓「……タント長イキシテ井テイツマデモ逢タウ思フ事カナマア」

3、「……みそぎぞ夏のしるしなりける」(九八)↓「……御祓ヲシテイルバカリガサ夏ノシルシチャ……」

この(エ)の1は「……ける人」を「……タ人」、また、(エ)の2は「思ひけるかな」を「思フ事カナマア」と訳している。「ワイ」の訳語があてられないのは、「語の切れざるなからにあるけりけるけれ」は訳さないとあるよってしている。(エ)の3は「夏のしるしなりける」を「夏ノシルシチャ」と訳している。しかし、「錦なりけり」(九八)を「錦チャワイ」、「我身なりけり」(九六)を「ワガミチャワイ」、「昔なりけり」(二〇〇)を「イフニモイハレヌ事チャワイ」と訳していることから考えて、(エ)の3の「しるしなりける」の「夏ノシルシチャ」も「シルシチャワイ」の「ワイ」を落した例外的なものと考えられる。

(オ)「けりけるけれ」が用いられていないで、訳語中に「ワイ」の用いられている例

1、「……恋ぞふちとなりぬる」(二三)↓「恋モサ……フカウナルワイ」

2、「……長月の有明の月を待出つる哉」(二二)↓「マツホドニオソイ有明ノ月ガハヤモウ出タワイ……コヌ事哉……」

3、「……諸共にあはれと思へ山桜……」(六六)↓「……ワシハ其方ヲキツウアハレト思フワイ」

4、「ちはやぶる神代もきかず立田川からくれなるに水くゝるとは」(二七)↓「此立田川ヘシゲウ紅葉ノ流レルトコロヲミレバトント紅鹿子紅シボリトミエルワイサテ奇妙ナ事カナ……」(傍線部補訳部分)

5、「うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬ

物を」(七四)↓「……初瀬ノ観音ニイノツタレバカヘツテ山オロシノ風ノヤウニハゲシウ成タ扱々ツイ事チヤハゲシウナレトハイノリセヌ物ヲキコエヌ観音ヂヤワイ」(傍線部、補訳部分)

この(オ)の1の「ぞ…連体形」の強調詠嘆表現に、訳語「ワイ」があてられている、また、(オ)の2では「待出つる哉」の「連体形+哉」の詠嘆表現に、(オ)の3では「あはれと思へ」という懇願的詠嘆的な命令表現に「ワイ」の訳語をあてている。(オ)の4・5は補訳部分での詠嘆表現に「ワイ」の俗語を訳語にして用いている。

「ワイ」は歌の詠嘆表現の訳語として、「かな」と共に多く用いられることを示すものである。

以上の「山踏」の実態を「遠鏡」に照応してみると、「遠鏡」では、

(ア)「けりけるけれ」と「ワイ」

(イ)「こそ」と「ワイ」

(ウ)「もこそ」と「——」

(エ)「けりけるけれ」と「——」

(オ)「——」と「ワイ」

(ア)「けりけるけれ」に対して「ワイ」の訳語が用いられている例

1、「年のうちに春は来にけり」(二)↓「年内ニ春ガ来タワイ」

この類のものは、二〇二例ある。

(イ)「こそ」の結びに「ワイ」がえられて訳されているもの。

1、「……鷹がねのなきこそ渡れ……」(二二三)↓「……毎夜ノ

泣テサ アカスワイ」

2、「……ふるさとと雪とのみこそ花はちるらめ」(二一一)↓

「……フル京ハサゾヤ雪ノフルヤウニサ ヒタノト花ハチルデ

アラウワイ」

3、「……わがかたによるこそまされ恋のころは」(六一〇)↓

「……夜ルガサ カクベツニ恋シウ思フ心ハマサルワイ」

この類のものは二四例ある。「こそ」の結びをみると、動詞の已然形が一三例(渡れ)五例、「すれ」二例、「まで」(待)二例、「思へ」、「流るれ」、「まされ」、「くれ」(来)、形容詞一例(かなしけれ)、助動詞一〇例(らめ)三例、「め」三例、「ね」(す)、「べらなれ」、「なれ」、「つれ」で、

結びの語に、格別とりたてた特色は見られない。動詞では「渡る、す、まつ、思ふ、まさる、来」などの語が、また、助動詞では「らむ、む、べらなり、ず、なり、つ」などの語が見られる。

(ウ)「もこそ」に対しては結びに「ワイ」の訳語が必ずしもえられない。

1、「花見ればこゝろさへにぞうつりける色にはいでじ人もこ

そしれ」(二〇四)↓「……ドウツ顔イロニハダスマイ 人が知ラウ

モシレヌホドニ 人が知テハアマリアアハウラシイ事チヤ」(傍線部

補訳部分)

2、「こよひこむ人にはあはじたなばたの久しき程にまちもこ

そすれ」(二八一)↓「……今夜ハ七タヂヤニヨツテ、棚機ノ久シイ

一年ノ間タヲ待ツノニアヤカツテ コチモ久シウ待ツヤウナ中ニ

ナル事モアラウホドニ」(傍線部、補訳部分)

「こそ」の項で述べたように、「もこそ」で、不安・懸念の気持をあらわしている。「山踏」の場合には「ワイナ」が結びにそえられていたが、「遠鏡」の場合には、「ワイ」はそえて訳されていない。「……ホドニ」という訳語が添えられている。

(エ)「けりけるけれ」が用いられていて、「ワイ」の訳語が用いられていない例

1、「……うめの花香をたづねてぞしるべかりける」(四〇)↓

「……梅ノ花ガソレチヤトドウモ見分ラレヌコレテハ匂ヒヲタツ

ネテ行テサ、知ラウヨリホカハナイ」

2、「……秋は深くもなりにけるかな」(二六七)↓「……サテノ

マア秋ハイカウ深ウナツタ事カナ」

3、「秋をおきて時こそ有けれ」(二七九)↓「……秋ガ過テカラ

又マイチド盛リノ時節ガサゴザリマス」

4、「……女郎花^{ウツクサ}うた、あるさまの名にこそ有^アけれ」(二〇一九)
↓「……女郎花^{ウツクサ}ト云名ハ ヒヨシナ名^{ヒヨシナ}テコソアレ……」

5、「心^{ココロ}しふかくそめてしをり^シければ……」(七)↓「トウカラ
花ノ事ヲ深ウ思ヒコソテ居ルガ……」

この類のものは一五例ある。(エ)の2の「……けるかな」を「……タ
事カナ」と訳したものの三例、「けるかな」を「事カナ」と訳したも
の一例、「けるかな」を「ヤウカナ」と訳したものの一例がある。(エ)
の3の「こそ……けれ」が五例あり、その訳語は「ゴザリマス、コ
ソアレ(三例)、コソ……ナレ」である。(エ)の1の「……ける」、「ぞ……け
る」が四例あり、その訳語は「ホカナイ、ナリマシタ、……デサア
ラウ、……ニナツテ」である。(エ)の5の例は一例である。「山踏」も
同じである。

(オ)「けりける^{ケリケル}けれ」が用いられていなくて、「ワイ」が訳語中に
用いられているもの。

1、「……山ぶきの花」(二二三)↓「……此ノ山吹ノ花^{ヤマフキ}ワイ」

2、「……ねをのみぞなく」(二五〇)↓「……ヒタスラナクワイ」

3、「……花のまに〜」(三九三)↓「……アノ花シタイニ致サ
ウワイ」

4、「……はつかに見えしきみはも」(四七八)↓「……ハツ〜
ニチヨット見エタ御方ワイノマア」

5、「人^{ヒト}にしれぬ思ひや……」(五〇六)↓「人ニシラサヌ此思ヒ
トシタ事ワイノ」

6、「……せきあへずもらしつるかな」(六七〇)↓「……ツイト
リハツシテモラシテノケタワイ」

7、「……世の中にすみわびぬとよ」(二五二)↓「……世ノ中ニ
住ミアグンダワイノ……」

8、「蟬の声きけばかなしな……」(七二五)↓「……カナシイ
ワイノ……」

9、↓「……アンジラル、ワイ」(三三七、傍線部、補訳部分)

(オ)の9のような補訳部分に「ワイ」の訳語が用いられているも
のが、一六例ある。(オ)の1は体言止めの詠嘆表現に「ワイ」の訳
語をあてたものである。(オ)の2は「ぞ……連体形」の結びに詠嘆の
「ワイ」をそえて訳したものであるが、他に「……鷹ぞなくなる
↓アレマア鳴クワイノ(四二二)」、「……時まつまにぞひはへぬる↓
……大部日数がタツタワイ(四五四)」などあわせて七例ある。この
他に、連体形止めに詠嘆の「ワイ」を補訳した例がある。「……袖
の露けき↓……袖ガ露デヌレタワイ(三六九)」である。

(オ)の4の「……はも」、(オ)の5の「……や」、7の「……とよ」、8の「……
な」は詠嘆の助詞を含む詠嘆表現であるが、その詠嘆表現に「ワ
イ、ワイノ」の訳語をあてたものである。この類のものは、他に
「わがこひめやは↓トホリノ事デハナイワイ(六九九)」がある。

(オ)の6の「……つるかな」の詠嘆表現に「……ノケタワイ、サ
テモ〜ツライ事ヲシタ事カナ」と「……ワイ……カナ」の訳語
をあてたものである。このような「……ワイ……カナ」を訳にあ
てたものに、「……長月の有明の月をまちいでつる哉↓オソイ有明
ノ月ガハヤモウ出タワイ……待ツ人ハサテモ〜来ヌ事カナ……
(六九二)」、「……あまのすむてふうらみつるかな↓……此ヤウニ
恨メシウ思フ事ワイノ……サテモグチナワシガ心カナ(八一六)」が
ある。遠鏡における訳し方のパターンの一つがこの例に見られる。
以上、「けりける^{ケリケル}けれ」に対しての「ワイ」の訳語について検討
したのであるが、「ワイ」は詠嘆表現の訳語の一つであって、「け
りける^{ケリケル}けれ」の訳語とは必ずしも限らない。「遠鏡」のこの訳し方
を「山踏」が見做ったことは云うまでもない。詠嘆の意の俗語と
して「ワイ」「カナ」が一般に広く用いられていることが、「山踏」
の例と考え合わせて云えることである。

(C) 「かな」と「カナ」について

(ア) 「かな」と「カナ」

(イ) 「——」と「カナ」

(ウ) 「もがな、かも」と「カナ」

(エ) 「かな」と「——」

(ア) 「かな」に対して訳語「カナ」が用いられている例

「かな」について、「山踏」の例言に

「哉は俗言にもかなといへば、俗言のま、にてはうときが多ければ、詞をかへ、或は下上におきかへなどして訳す、此詞は歎息の詞にて。こころをふくめたる事多ければ其詞を加ふ」とある。この例言は、もちろん「遠鏡」に倣ったものであることは言うまでもない。

この「かな」は「山踏」には、一三例ある。

1、「……有明の月を待つる哉」(二二)↓「……有明ノ月ガハマウ出タワイ、約東モセナンダ有明ノ月サヘ待チダシタニソレニサ待人ハ扱モ〜コヌ事哉 是ハマアドウシタ事ゾ」(傍線部、補訳部分)

2、「……人の命のをしくも有哉」(三三八)↓「男ノ命ガウセルテアラフソレガマア惜イ事カナ」

例言にもあるように「詞をかへ、……下上におきかへなどして訳し、また「かな」は歎息の詞なので、「こころをふくめたる事」が多いので、その言葉が補われて訳されることがあるという例が、(ア)の1の例である。また(ア)の2の例のように「有哉↓惜イ事カナ」の「事」が補われて訳される場合が多い。この例は他に、「なりぬべきかな↓悲シイ事カナ(四五)」、「恋のみち哉↓恋ノ道カナマア(四六)」、「思ふ比かな↓物思ヒヲスル事カナ(四八)」などがある。

(イ)「かな」が用いられていなくて、「カナ」の俗語が訳語中に用いられている例

この類のものは三例ある。

1、「……神代もきかず立田川からくれなるに水く、るとは(一七)↓「……シゲウ紅葉ノ流レルトコロヲミレバトント紅鹿子紅シ

ガアツチヤガ……」(傍線部、補訳部分)

他に「……夜ヲ守リ明スハ詭シヒ事カナ(二、補訳部分)」、「……サテモ〜ツレナイ人カナ(一九、補訳部分)」がある。この「カナ」はすべて詠嘆の意のものである。

(ウ)「もがな、」に「カナ」の俗語が訳にあてられているもの。「かも」に「カナマア」の訳語のあてられているもの。

1、「……思ひでに今一度のあふ事もがな」(五六)↓「……思ヒデニドウゾマ一度逢フヤウニシタイ事カナ」

2、「……なが〜し夜を独かもねむ」(三三)↓「……ナガ〜シイ夜ヲ思フ人ニモアハズニ独寝ル事カナマア」

3、「……衣かたしき独かもねむ」(九二)↓「……今宵モ独リネヲスル事カナマア」

(ウ)の1の「もがな↓……タイ事カナ」は願望の意に詠嘆の気持を含めたものである。また、(ウ)の2、3の「かも↓カナマア」は詠嘆の意である。

(エ)「かな」は用いられているが、俗語「カナ」が用いられていないものの例は、「山踏」にはなく、「遠鏡」にある。

この「かな」に対して「カナ」の訳語をあてた「遠鏡」の実態は、次のごとくである。

(ア) 「かな」と「カナ」

(イ) 「——」と「カナ」

(ウ) 「もがな・かも」と「カナ」

(エ) 「(も)ーか」と「カナ」

(オ) 「かな」と「——」

(カ) 「やー連体形」と「デカナアラウ」

(※)その他

・「かも」と「カイマア カイノ カヤレ」
 ・「や・やは」と「カイ」

(ア)「かな」に対して「カナ」を訳語にあてた例

1、「……うぐひすだにもなかずも有かな」(二〇)↓「……サテモマア驚サヘナカヌ事カナ」

2、「……おほつかなくもよぶこどりかな」(二九)↓「……人ヲヨブガ ドコチャヤラサテくマアシツカリトシレヌ事カナ」

この類のものは六三例ある。

(イ)「かな」が用いられていなくて、訳語中に「カナ」の用いられている例

1、「……春がすみ峯にも尾にもたちかくしつ、」(五一)↓「……花ヲ見セヌワイ、サテモイヂノワルイ霞カナ」(傍線部、補訳部分)

2、「……鷹の数さへ見ゆる秋のよの月」(二九)↓「サテモサヤカナ月カナ……」

3、「……道ふみ分てとふ人はなし」(二八七)↓「……サテモく何モカモソロウテサビシイコトカナ」(傍線部、補訳部分)

「(も)……か」「や」に「カナ」をあてた例を除く、(イ)の1、2、3の類のものは一三例ある。そのうち九例は、補訳部分に用いられている。(イ)の1のような、「……つ、」の文脈の中で「カナ」の用いられているものは、他に、

4、「……雨も涙もふりそぼちつ、……」(六三九)↓「……涙モ雨ト同シヤウニ……サテモくカナシイナンギナ事カナ」

5、「……わが身からうきよのなかと歎きつ、」(九六〇)↓「ナシジフナ身ハツネぐサテモワイ世ノ中カナくト歎イテ……」がある。

(ウ)「もがな・かも」に対して「カナ」の俗語を訳にあてた例

1、「……君が八千代にあふよしもがな」(三四七)↓「……ソコ

ノ八千歳ノ賀ニドウゾ逢ウヤウニシタイ事カナ」

2、「世ノ中にさらぬ別れのなくもがな……」(九〇一)↓「……ドウゾ逢レヌ別レト云事ノナイヤウニシタイ事カナ」

他に、「……人をあくよしもがな……逢ハレルヤウニシタイ事カナ(六八三)」などがある。

3、「……よせくる浪のしばくも見まくほしき玉づ嶋かも」(九一二)↓「……サテく面白イケシキカナ」

「もがな」を「……タイ事カナ」と訳す訳し方は願望の意に詠嘆の気持を含めたものである。「山路」の場合も同じである。

(エ)「(も)ーか」の詠嘆表現に「カナ」の訳をあてたもの。この類のものは一八例ある。

1、「……しら露を玉にもぬける春のやなぎか」(二七)↓「キレイナ白イ露ヲマア玉ニシテツナイテ、サテモく見事ナ春ノ柳カナ」

2、「うつせみの世にもなるか花ぎくらくと見しまに……」(七三二)↓「……人間ノ一生ノアヒタハ、ナンノマモノイ物ヂヤガ、ソレニマアヨウ似タ事カナ」

この「もーか」の詠嘆表現について、あゆひ抄は「もーか」は「さてもーことかな」と訳すと云っている。この他に、「いとはやもなきぬる鷹か……」↓「キツウ早ウマア雁ハナイタ事カナ……」(二〇九)、「わかるれどうれしくも有か……」↓「御別レ申スハナゴリヲシウハアレド、サテくマア嬉シイ事カナ……」(三九九)などがある。

(オ)「かな」が用いられているが、俗語「カナ」の訳語が用いられていない例

1、「かつ見れどつくもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば」(八八〇)↓「月ハカウシテ見テ居ツ、モマアウトくシウ思ハル、事カ……」

2、「……あらたまの 年をあまたも すぐしつるかな」(二〇〇五)↓訳なし

この(オ)の1の「かな↓カ」であるが、(八七七)の歌に「おそくもいづる月にも有かな……サテモ↓マアオソウ出ル月デゴザル事カナ……」とあるが、それと同じ用法である。(八七七)の歌では「も…かな」を「マア…事カナ」と訳しているので、(オ)の1の場合も「も…かな」を「マア…事カナ」と訳すべきところを「マア…事カ」と「カナ」の「ナ」を落したものと考えられる。

(カ)「や…連体形」の訳に「……デカナアラウ」をあてた例

1、「……川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ」(四三三)↓
「……ソノ水テ袖ガヌレルガ、今年モ又ヌレルデカナアラウ」

2、「……紅葉にあける神やかへさむ」(四二二)↓「……御返シナサルデカナゴザラウ……」

3、「……春の日の長くや人をつらしと思はむ」(六二四)↓「……人ヤ春ノ日ノ長イノニ シンキニ思ヒクラシテ イツマデモツライ↓ト思ウテ一生ヲタテルデカナアラウ」

この係助詞「や」であるが、文意は軽い疑問をあらわし、その結びに「なむ、む、らむ」などの推量の助動詞を伴うのが特色である。その訳はすべて「……デカナアラウ」である。「や」に「カナ」が添えて訳してあるので、「カナ」の「カ」は疑問の意、「ナ」は念を押す終助詞と考えられる。この類のものは一六例ある。補訳部分に用いられているものもある。それは「……世ノ中ガ無常ナ物デ死ンダヤウニ云ヒナシテオクデカナアラウガ……」(六〇三)である。

「遠鏡」の訳語の特色あるもの一つである。

(中)その他

(i)「かも」と「カイマア カイノ」など

(ii)「や・やは」と「カイ」

「かも」の訳語に「カナ」が用いられていることについては前

述したが、「かも」にはこの他に「カイマア」の訳語、「カイノ」「カヤレ」の訳語があてられる場合がある。

1、「……春日なるみかさの山に出し月かも」(四〇六)↓「……故郷ノ三笠山へ出タ月デアアラウカイマア」

2、「……たなびく山の花のかけかも」(二〇二)↓「……山ノ花ノ色ガ霞ヘウツツタノカイノ」

3、「……人のしるべくわがこひめかも」(六六四)↓「……音ニモ人ノシルヤウナフリヲセウカマア、ソノキツカヒハナイゾイナ」

4、「……落る瀧の白玉ちよの数かも」(三五〇)↓「……オチル瀧ノ白玉ノ多イ数ハ御寿命ノ千年ノ数カヤレ……」

(キ)の1の「かも↓カイマア」は詠嘆、2の「かも↓カイノ」は詠嘆の意をこめた疑問、3の「かも↓カマア」は詠嘆の意をこめた反語、4の「かも↓カヤレ」は詠嘆の意をそれぞれあらわしている。

(ク)の「や・やは」を「カイ」と訳した例は、山踏に二例ある。それは、

5、「……風ふけばいでそよ人を忘れやはする」(五八)↓「……オマヘコソ忘レサツシヤレワシハ少モ忘レハイタサヌ、其ヤウニ約束シタ人ヲ忘レマセウカイ」

6、「ながらへばまた此比やしのばれむうれしとみし世ぞ今は恋しき」(八四)↓「……ナガイキシテキタラバマタ後ニハ此ツライト思フ今ガマタナツカシウナルデアアラフカイ」

「遠鏡」には五一例ある。例えば、

7、「大ぞらは恋しき人のかたみかは……」(七四三)↓「空ハ恋シイ人ノ形見カイ、形見デモナンデモナイニ……」

8、「思ひきやひなのわかれにおとろへて……」(九六二)↓「……思フタカイ 思ヒヨラナンダ事チャ……」

9、「……むくいなりけりやは」(一〇四二)↓「……ムクイト云事ハナイ事カイ キットアル事チャワイノ」

10、「春雨のふるはなみだかさくら花ちるををしまぬ人しなれば」(八八)↓「……此ヤウニ此節春雨ノフルノハ世間ノ人ノ桜ヲヲシンデ泣クナミダカイ」

11、「……日のくれしけふやはあらぬ」(八四六)↓「……今日ハソノ去年ノ御崩御ノ日デハナイカイマア……」

などがあがるが、すべて、疑問、反語の「や、やは、か、かは」の訳語に「カイ」が用いられている。しかし、一般的には、疑問は、

12、「……一とせをこそとやいはむことしとやいはむ」(二)↓「……同ジ一年ノ内ヲ、去年ト云タモノデアラウカ ヤツハリコトシト云タモノデアラウカ」

13、「……春たつけふの風やとくらむ」(二)↓「……春ノキタ今日ノ風ガ フイテトカスノデアラウカ」

のように「や」に「カ」の俗語をあててあらわされる。「や、やは、か、かは」にあてた「カイ」は親しみをこめて、相手に疑って尋ねたり確かめたりする気持や、反語の意をあらわす時に用いられている。「カ」「カイ」は、詠嘆、疑問、反語の意をもつ語であるが、「ワ」「ワイ」は詠嘆の意をもち、「ゾ」「ゾイ」は強調の意味をもつ。この遠鏡の用語の特色は、この他に禁止をあらわす「ナイ」がある。

〔禁止〕の「ナイ」について

14、「いたくななきそ」(二九六)↓「……アマリ泣カシヤルナイ」

15、「……いたくなわびそ……」(五〇)↓「アマリツラウ思ウナイ」

16、「……秋ぎりはけきはなたちそ」(二六六)↓「……霞ハドウゾケサハ立テクレルナイ」

17、「もみち葉をふきな散しそ」(二八五)↓「ソノヤウニヨソヘフキチラシヤルナイ」

この例は、他に、「なとがめそ」↓「トガメテ下サルナ」(五〇八)、「

「ない」とひそ↓「イヤガラシヤルナイ」(二〇三六)、「ななきそ」↓「アマリナクナイ」(一〇六七)などがある。禁止「ナ」に終助詞「イ」のついたものである。この「な」そ」に「ナイ」という訳をあてたものの他に、例えば、「なとがめそ」↓「ドウゾトメテ下サルナ……」(三六八)のような例もある。

この「ーイ」のつく形の語であるが、もう一つ「ートイノ」がある。

18、「わたつみのかざしにさせる白たへの浪もてゆへるあはぢしま山」(九二)↓「……ソレデアノ浪ハ 海ノ神様ノ御ツムリノカンザシチヤトイノ、ソレニアノ淡路鳴ヲコレカラ見レバ……」

である。この「……トイノ」は「……トイウコトデスヨ」という意である。江戸時代に「ーといな」「ーといの」と用いられ、女性に多く用いられた特色ある用語である。「ーイ」はことばをやわらげる働きをする終助詞であるから、「ワイ、ワイノ」「カイ、カイノ、カノ」(九二八)、「ゾイ、ゾイナ」(六六四)、「ゾイノ」(七八〇)、「ナイ」(禁止)、「トイノ」と並べてみると、そこに「女の言葉は、うちとけた物言いが多く」と云っている例言の女性風の用語の一つにこの終助詞「ーイ」「ーイノ」の表現があげられ、「遠鏡、山路」の表現、用語の特色をこの点に見ることができるといえる。

上記(カ)のところ「……テカナアラウ、……テカナアラウ、……デカナアラウ」について述べたが、上記(キ)のところ述べた「や、やは、か、かは」に「カイ」の訳語をあてた例をみると、「や」に「カナ」「カイ」の訳語をあてている。さらに、次の例を見ると、

19、「風やふくらむ」↓「……フクデアアラウカイ」(二六八、一七〇)

20、「人の見ることやくるしき」↓「人ノ見ルノガメイワクナカイ」(三三五)

21、「いまもかもさきにはふらむ」↓「ケフコノゴロカナ、見事ニサイタデアラウ」(二二二)

22、「はかなくもちる花ごとにとぐふこ、ろカ」↓「……サテモ
マア アホラシイ事カナ(二三三)」

23、「花やさくらむ↓花ガアルカシラヌ(九四)」

24、「鹿はいまやなくらむ↓鹿ガモウナクデアラウカ(二一九)」

「や」「か」に「カ、カイ、カナ」の訳語をあてている。

この「カナ」であるが、「も…か」の訳語の場合は詠嘆の意であり、「や…らむ、や…む、や…なむ」の訳語の場合は軽い疑問の意味である。このことは、「カイ」の場合にも云えることである。「かも」の訳語の場合は詠嘆の意味であり、「や、やは、か、かは」の訳語の場合は軽い疑問の意味である。「カイ」は主として文末に用いられる。このように「遠鏡」には訳語、訳し方、その用語の用い方にパターン化された特色を、実態の中で見つけることができる。

おわりに

以上、本研究は、「山踏」と「遠鏡」の俗語(訳語)―主として助詞―の実態を例言に従って、照応させながら検討してみた。「山踏」の俗語は「遠鏡」の俗語に倣っており、雅語に対する訳語||俗語及びその訳のつけ方はすべて「遠鏡」に忠実である。また「遠鏡」では「らむ↓デアラウ、ヤラ、カシラヌ」、「けむ↓タデアラウ、タカシラヌ、タコトヤラ」、「なむ↓デアラウ、カシラヌ、ヤラ、ヨイ、カシ」、「ら↓サウナ」や「だに↓サへ、セメテ…ナリトモ、ニモ」、「さへ↓サへ、マデガ、マデモ、モ」、「のみ↓バツカリ、ヒタモノ」など実態の検討すべきものがあるが、別の機会に譲りたい。また、「かざし抄」「あゆひ抄」(竹岡正夫氏の論考がある)、その他の資料との比較すべき点もあるが、すべて割愛して別の機会に譲ることにした。

本論文は、その一部については、先に深井が大学院修士課程の国語学特別演習において小西護・水持邦雄と共に検討したことが

あるが、今回、改めて道井 登が全般にわたって検討を重ね、報告するものである。

使用したテキストは、能登、宇出津の加藤吉彦の写本(「文化十四年丁丑十月 従五位下源朝臣吉彦 花押」の奥書を有する)によった。

(昭和六十年九月十七日受理)